

防災・減災に関する児童生徒のアクティブな思考・判断を促す社会科授業モデルの開発 と実践

教育実践高度化専攻授業実践開発コース 准教授 山内 敏男

I 問題の所在と研究の目的社会科における防災・減災教育の実際

1 防災・減災教育の充実？

- (1) 東日本大震災以降、数多く開発、実践されてきた防災関連の教材や授業
(社会科教育関係3学会での発表数：74報告)
- (2) 文部科学省「学校防災のための参考資料『生きる力』を育む防災教育の展開」
(2013年3月)
- (3) 学習指導要領改訂にともなう内容の規定
 - 地理：空間情報に基づく危険の予測に関する指導
 - 公民：防災情報の発信・活用に関する指導・・・結果→災害に関する基礎的な知識を習得する授業
災害と防災への努力をしている人を取りあげた授業
避難のスキルを習得する授業

の充実が求められている。

る。

2 課題

- (1) 予測、避難重視の学習→減災の視点から授業が実践されることは少ない。
- (2) 減災の視点形成は不十分である。
- (3) 歴史学習における防災教育は明確ではない。

II 歴史学習における防災教育の基本原則

1 目標としての防災教育

社会科の成立要件「社会認識形成を通して公民的資質を育成する」をふまえると、歴史学習において防災教育を組み込むためには、年表から災害の頻度を読み取ることと(歴史に着目する)

災害発生時に講じた対処の成果と課題を理解すること(現代から歴史を判断する)

災害発生から復興までを捉え、社会の仕組みを認識すること(歴史を構築する)

といった階層性をふまえた学習を行う必要がある。

2 内容としての防災教育

- (1) 歴史研究における内容知の整理

→東日本大震災以降、歴史学からの問題提起(保立道久、成田龍一ら2013)

- ・その出来事を伝え、さらにこれまでの経験と知識を再検証する必要性。
- ・これまでの知を反省し、新たな知を練り上げていく営みが要請されている。

- (2) 内容知の具体

- ・地震による社会への影響に着目(磯田2015)
災害による人的被害が社会に与える影響は大きい。
復興景気により利益がもたらされる。
- ・先人が残した「災害知」の発掘(都司2013)

過去の災害から今後起き得る被害を想定し、その対策について検討できる。

- ・従前の歴史学の研究における、視点の不十分さの指摘（平川 2013）

災害からの復興という視点で産業振興や新田開発といった事象を捉え直すことで新たな解釈が可能

（3）歴史学の研究成果から抽出される特質

- ・過去の災害による被害を想定することで、未来における災害の被害予測、災害への対策が精緻化される。
- ・災害後の復興の視点から歴史事象を解釈していくことで、これまでの解釈や評価とは異なる見方・考え方が導き出される。
- ・「災害知」を蓄積することで、災害への備え、危機対応のすべが理解できる。

3 方法としての防災教育

（1）災害の発生状況、被害状況を知ることにより焦点化すると、状況把握にとどまる可能性→状況把握をした上で、当時の社会問題、社会に与えた影響を探究させていく授業展開が必要。

（2）「災害知」を扱う授業は、災害の状況把握に加えて安全、安心の視点から当時の取り組み状況を明らかにできるという点に意義。ただし、減災の要因を取りあげただけでは、当時の社会の仕組み全体の特徴と限界までは理解できない。

→災害の発生時における政治や経済の仕組みの変容も同時に取りあげていくことが必要。

（3）災害、復興をとおして社会の仕組みを扱う授業

→特設単元や投込み教材の設定など、特別のことをしなくとも防災・減災について、授業で扱うことができる。

中学校歴史学習の方向性

- ①災害の名称や繰り返し起きていることを習得させるにとどまらず、防災や減災から災害発生時の状況、復興の過程までを包摂した上での認識形成におく。
- ②扱う時代の心性や常識として考えられていたことをふまえ、過去に起こった災害に人々がどのように向き合い、対応したのかを認識し、当時の社会構造の特徴と限界を認識していくことを目指す。
- ③災害の発生から被害状況までを時系列でとらえるのではなく、倒叙法の原理を取り入れ、復興の様子、災害の発生、防災や減災への取り組み状況と遡及的に捉える。そして、実際に取りられた方策の妥当性を吟味、判断させ、いかに防災や減災に取り組むべきであったかを考えさせることで、アクティブな思考・判断を促し、現代社会に生かせることは何かを問う授業構成としていく。

Ⅲ 復興から辿る歴史学習の展開

1 授業の構成

第一段階 復興の過程における問題点の把握

第二段階 問題の原因の追究

第三段階 災害の状況と被災した（対策が十分でなかった）原因の追究

2 単元

「寛保2(1742)年の大洪水－関東平野から信濃に渡る大災害－」

背景：江戸時代中頃～17世紀以来の関東平野における新田開発の悪影響が顕在化し，洪水被害の危険の高まった。→開発が災害を誘発した。

取りあげる事象・人物：寛保2(1742)年の大洪水，武蔵国入間郡久下戸村（現埼玉県川越市）の名主，奥貫友山。

「大洪水の時飢えた者たちを救ったのは，私の生涯の誤りだった。」と悔恨の情を吐露！

メインクエスト：「なぜ後悔に至ったのだろうか」

3 単元のねらい(到達目標)

- ① 18世紀に入り洪水が増え，幕末期には地震が多発していたといった，江戸時代の災害の傾向を読み取ることができる。
- ② 寛保2年の洪水時，川越では藩の対応が遅く，大まかな井勘定で救済物資が支給されたため，迅速さと実効性に欠けており，村の名主奥貫友山は食料代金の貸し付けや雑穀類の無償支給をするなど，総額100両あまりも支出し，藩主から賞賛された一方で，分不相応に手広く救済したことへの反省と，僧侶，領民（百姓），物乞いの人たちからねたまれ，不公平感をもたれ，復興を行ったことに後悔していたことを理解することができる。
- ③ 18世紀に洪水が頻発したのは17世紀の新田開発に起因していること，藩は領民を十分に守ることができなかつたことを関連付け，幕府の政治の仕組みが十分に機能しなくなっていたことを理解することができる。
- ④ 災害が多発したことにより，村の役割，共同性は拡大する一方，幕府や藩の対応は取られなくなつたことから幕藩体制の維持は困難になつていったことが理解できる。
- ⑤ 寛保2年の洪水時，友山，藩，領民が取つた対応が妥当であつたかどうかを考え，特徴と限界を理解することができる。

4 単元構成(3時間完了)

時 ねらい	主な学習活動	主な発問
第1時 ねらい ①，②	<p>① 江戸時代の災害の傾向を読み取り，18世紀中頃に起きた洪水を記録した奥貫友山が復興に携わつていたことを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害の傾向を資料から読み取る。 ・武蔵国入間郡久下戸村の位置を確認し，友山が行つた復興策を読み取る。 <p>② 「大洪水の時飢えた者たちを救つたのは，私の生涯の誤りだった。」と友山が述べていた資料を提示し，なぜ後悔したのか，問題意識をもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 資料から友山が後悔した原因を抜き出し，その根拠を発表する。 ・友山，藩の復興活動とその結果を資料から読み取る。 ・領民（百姓）の行動を資料から読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友山，藩，領民（百姓）それぞれどのような対応をしたのか。 ・なぜ，奥貫友山は復興に力を尽くしたのに，後悔しているのか。 ・この洪水に対して，幕府，藩，友山，領民はどのような

	<p>③ 幕府、藩、友山、領民はどのように対応し、復興する必要があったのかを検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれができたであろう対策を推測する。 	<p>に対応し、復興する必要があったのだろうか。</p>
<p>第2時 ねらい ③</p>	<p>18世紀には洪水が頻発し、幕府、藩は十分な対策を取ることができなかった原因は何かを検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 洪水の被害が拡大した原因を資料から検証する。 <ul style="list-style-type: none"> ・18世紀の洪水の発生度合いを資料から確認する。 ・江戸時代の山の状態を資料から読み取る。 ・水塚を取り壊す領民（百姓）の実際を読み取る。 ○ 十分な対策を取ることができなかった原因を資料から検証する。 <ul style="list-style-type: none"> ・幕府、藩の財政状況は悪化していたことを資料から読み取る。 ・藩が行った対策は時間がかかり、量も少なかったことを資料から読み取る。 ○ 不十分な対策の結果、生じた影響を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ18世紀になって洪水が頻発し、被害が拡大したのか。 ・なぜ幕府、藩は十分な対策を講じることができなかったのか。
<p>第3時 ねらい ④、⑤</p>	<p>① 災害により幕府の政治の仕組み（幕藩体制）、村の仕組みはどう影響を受けたのかを検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ その後の災害で幕府が取った復興活動を確認する。 ○ 十分な復興ができない幕府や藩の立場（信頼）はどうなっていくのか考える。 <p>② 友山、藩、領民（百姓）それぞれの対応は妥当であったかを検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 江戸時代に行われていた他の復興対策と比較しながら判断する。 ○ 防災、減災の視点から見た意義と課題、現代社会に生かせることをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・その後、幕府の政治の仕組み（幕藩体制）、村の仕組みはどう影響を受けたのか。 ・友山、藩、領民（百姓）それぞれの対応は妥当であったか。

IV 実践の結果と考察

単元のねらいを分析視点として、生徒の認識内容を把握し、構想した単元、授業の有効性を検討する。対象とした生徒は本学附属中学校2年生91名である。なお、紙幅の関係上、実践に際しては生徒の固定的、常識的な歴史認識をゆさぶり、実際に取られた方策の妥当性を吟味、判断する手がかりがつかめたかどうかを検証することを意図し、第1時を表のように分析した。

表 第1時におけるねらいと問い、評価基準及び集計結果

No	ねらい	問い	評価基準A（十分満足である）、B（おおむね満足である）、C（不十分である）	集計結果
1	江戸時代の災害の傾向を読み取ることができる。（災害の発生、被害の状況への理解）	江戸時代の災害年表から災害の傾向を読み取るう	A:編年による災害の傾向を読み取ることができる。 B:災害の多寡を読み取ることができる。 C:災害の傾向を読み取ることができない。	A:39人 B:51人 C:1人
2	名主である友山が復興を行ったことに後悔していた理由を理解することができる。	なぜ、友山は復興に力を尽くしたのに、後悔しているのか	A:後悔の原因のうち、複数を関連付けて説明することができる。 B:後悔の原因の一つを説明することができる。 C:後悔の原因を説明することができない。	A:61人 B:30人 C:0人
3	幕府、藩、友山、領民はどのように対応し、復興する必要があったのか考えることができる。	この洪水に対して、幕府、藩、友山、領民はどのように対応し、復興する必要があったのだろうか。	A:政治の特色である仁政イデオロギーをふまえるなど社会の仕組みをふまえた対応の不十分さを指摘し、根拠とともに復興策を説明することができる。 B:根拠とともに復興策を説明することができる。 C:根拠に基づいた説明ができない。	A:45人 B:43人 C:3人

No.1:各災害の多寡を読み取らせるだけではなく、編年で見た傾向について読み取らせるなど問いの再検討が必要。

No.2:18世紀中盤においては、依然として仁政イデオロギーが有効に働いていたことを読み取ることができる。（社会の仕組みの理解）

No.3:災害と幕藩体制の動揺、滅亡とを関連付けて捉えることができる。

V 研究の成果と課題

1 研究の成果

本研究の成果は、次の3点である。

(1)災害から社会の仕組みがわかり、論争的な社会問題を考察、判断する学習を組み込んだ単元「幕藩体制と大洪水－奥貫友山の後悔－」の実践化。

(2) 歴史研究における内容知の整理を行い，防災・減災に関わる認識，そして復興までを視野に入れた認識形成ができる中学校歴史学習の提示。

(3) ①復興の過程における問題点の把握，②問題の原因の追究，③災害の状況と被災した原因の追究，④防災，減災の面から見た対応策の判断からなる学習がアクティブな思考・判断を促す学習展開となることを提示。

2 研究の課題

次の2点を今後の課題とした。

(1) 過去の被害から未来の災害予想までを視野に入れた単元の実践化。

(2) 当時の社会構造の特徴と限界へと認識を深化させ，現代社会に生かせる学習の分析，検討。